

2025 年 5 月 1 日日本子ども伝道学校メッセージ

5 月学院福音化

シム・ジュウファン先生

5月の学院福音化です。全体の主題は「道しるべ」です。

そこで道しるべについて調べてみたところ、二つの意味があります。道路や道のために距離や方向を教える案内の標識であったり、あることの目標や指針をいうことでも使われます。ですから、人生の目標、方向、こういうことだと言うことができます。それゆえ、今月にはその二つの意味をみな含んだみことばとして黙想したら良いでしょう。日本語ではこのように説明されています。「道しるべは、道案内や目標、指針などを意味する言葉です。物理的な道案内だけでなく、人生や研究の指針など、抽象的なものにも使われます。」

1 課 カルバリの丘の道しるべ

ー「イエス様の十字架の道、十字架の生き方」

では、それで最初の主題はカルバリの丘の道しるべです。カルバリの丘の契約というのは十字架を言うことでしょう。そのためにカルバリの丘の道しるべというのは、「イエス様の十字架の道、十字架の生き方」それを言っていると言えます。イエス様は神様です。そして、イエス様は天の王です。復活された主は、今も神様の右の座に着かれて、世々かぎりなく王として治めておられます。永遠から永遠まで、神様であり、王だということです。

そういうイエス様がこの地に来られて、人となってしばらく生きられた生き方はどのようなものだったのでしょうか。苦難、患難、迫害、自分を否定した十字架だと言えます。信徒も同じなのです。信徒は、創造の前に選ばれた神の国の民です。創造の前にすでに十字架の契約によって救われて、神の国での永遠のいのちを約束された者です。キリストとともに王として治めると、ヨハネの黙示録にも約束されています。ところで、そういう信徒が、肉体をもって、この荒野の人生を生きなければならない理由が何なのかということです。答えを先に言います。「ああ、救いということは、私が何かを良くしたから受けるのではないのだな。神の国は、私がこの地で、何か良い行いを積み重ねるから行ける所ではないのだな。そこは、ただイエス様の十字架で完成されるということのだな」私たちの救いと神の国はそうだということです。それを学んで行くのです。そして、イエス様がこの地で先に生きられた苦難、患難、迫害、自分を否定して十字架を負う生き方をしていくのです。

パウロは、イエス・キリストと十字架の他には知らないことにしたと告白をします。また、イエス・キリストと十字架の他には伝えないことにしたとも告白をしました。イエス・キリストとその方の十字架だけが、救いの道になるからです。それだけではなく、イエス様の十字架だけが、私たちの力になって、まことの希望になるからです。

キリスト教はイエス・キリストと十字架がすべてです。それを私はこのように一度表現をしてみました。
イエス・キリストと十字架を1+1だと考えます。スーパーに行って一つを買ったら、もう一つついてきたらどれくらいうれしいでしょうか。つまり、イエス・キリストと十字架は、そのようなものでしょう。ところが、今日のキリスト教は、あまりにもほかの話をよくします。1+1で満足すべきなのに、1+2、1+3、多くのことをしきりに要求するのです。なぜそのように多くのプログラムと戦略と公式が、信仰生活に必要なものになったのか分かりません。キリスト教ではなく、教会教、または、伝道教、リバイバル教、成功教になってしまったのではないのでしょうか。

では、ガラテヤ2章20節はととてもよく知って暗記しているみことばですが、いっしょに見てみましょう。
ガラ 2:20

"もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。"

私はイエス様とともに十字架で死にました。そしてもう私の中にイエス様だけが生きておられるということです。そのために、この最後の部分に話した「神の御子の信仰の中で生きる」ということです。

韓国語や日本語の聖書が少し翻訳が違うのではないかと思っているのですが、エペソ4章13節にも同じ話が出て来ますが、
エペ 4:13

"私たちはみな、神の御子に対する信仰と知識において一つとなり、一人の成熟した大人となって、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するのです。"

神の御子に対する信仰で生きるというのではなく、「神の御子の信仰の中で生きる」ということが正しい解釈です。私は死にました。イエス様だけが生きておられます。死んだ私がどのようにイエス様に対する信仰を発揮してやり遂げることができるでしょうか。私の中に生きておられる、そのイエス・キリストの信仰の中に私は留まっているだけだという告白です。英語聖書も of the sun of God だと正確に翻訳をしています。「神の御子の信仰」

パウロはそのような生き方をIコリント15章31節でこのように表現しています。
Iコリ 15:31

"兄弟たち。私たちの主キリスト・イエスにあって私が抱いている、あなたがたについての誇りにかけて言いますが、私は日々死んでいるのです。"

主にあって、日々死んでいる、日々十字架に釘づけられているということでしょう。

事実、イエス様とともに十字架で一度死んだらそれで終わりなのに、日々死ぬということです。それは、いったい何の話でしょうか。イエス様は、事実はこの話を先にされました。

ルカ 9 章 23節

"イエスは皆に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。"

イエス様が先に話されているでしょう、日々自分の十字架を負ってと言われています。パウロがした告白もイエス様が言われたことも同じことです。事実、それが聖書全体の話なのかもしれません。

このように、日々死ぬことについてパウロが、Ⅱコリント 4 章 10節から 11節では、このようにまた、説明をしています。

Ⅱコリ 4:10-11

"私たちは、いつもイエスの死を身に帯びています。それはまた、イエスのいのちが私たちの身に現れるためです。私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されています。それはまた、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において現れるためです。"

2 節とも同じように「いつも」「絶えず」死ぬという表現をしています。私たちの生き方を通してイエス様のいのちだけが現れなければならないためだということです。それで、私たちはイエス様が先に行かれたその十字架の道、そして、その道しるべに従いながら生きる者であるべきで、その行く途上、道の上にイエス・キリストのいのちを流すのです。それはまるで、道しるべのように。それでこそ、またほかの人々が、その跡にしたがって、同じように十字架の道を歩むようになるのです。それがカルバリの丘の道しるべです。

第2課 オリーブ山の道しるべ

－「従順」

第2課です。オリーブ山の道しるべです。

イエス様が公生涯を始めながら初めて宣言されたみことばは何でしょうか。「悔い改めなさい。神の国が近づいた」そのみことばは、どこかの完成された天国が近くにきているのではなく、イエス様が天国としてまた、神の国として、この地に来られたことを語られたのでした。イエス様こそが、すなわち天国なのです。ルカ 17 章 20節から 21節を見ると、神の国がいつ臨むのかを尋ねるパリサイ人にイエス様が二つを答えられる場面があります。

ルカ 17:20-21

"パリサイ人たちが、神の国はいつ来るのかと尋ねたとき、イエスは彼らに答えられた。「神の国は、目に見える形で来るものではありません。

『見よ、ここだ』とか、『あそこだ』とか言えるようなものではありません。見なさい。神の国はあなたがたのただ中にあるのです。"

1つ目は、「神の国は、目に見える形で来るものではありません」と言われます。このみことばの中には神の国についてのとても重要な本質が入っています。神の国、王国、それは、バシレイアと言うのですが、その単語の中には、統治と治めるという概念が入っています。当時、目に見える力があるローマを征服する、もっと大きくて強いメシア王国を待っていたユダヤ人とパリサイ人に、神の国はそういう目に見える国として臨むのではないということと言われたのです。

2つ目にイエス様が答えられたことは、神の国は、ここにある、あそこにあるというのではなく、あなたたちのただ中にあると言われました。その話は神の国はあなたたちの心の中にあるのということと言われたではありません。なぜなら、パリサイ人に向かって答えられたことです。パリサイ人はイエス様をメシアとしてキリストとして信じない者たちです。そういう人々に、神の国はあなたたちの心の中にあるとは言われるはずはないでしょう。では、あなたたちのただ中であるということは、何の話なのでしょうか。それは、パリサイ人の中に立って語っておられるイエス様ご自身が、神の国として立っておられるということで、それを言われたのです。このように、神の国としてこの地に來られたイエス様は、父なる神様の統治と治めることの中で、十字架の死にまで従順にするしもべとしての生活を送られました。そして、その生き方が私たちに求められているのです。

ヘブル 5 章 8 節から 9 節で語っておられます。

ヘブ 5:8-9

"キリストは御子であられるのに、お受けになった様々な苦しみによって従順を学び、完全な者とされ、ご自分に従うすべての人にとって永遠の救いの源となり、"

皆さんが、このみことばを深く黙想してみるように願います。ピリピ 2 章のみことばとも似たみことばです。御子であるにもかかわらず、苦難を通して従順を学ばれました。私が序論で話した部分です。イエス・キリストの生き方は、苦難、患難、迫害、自分を否定して十字架を負うこと、それがまた信徒である私たちにも同じように求められます。それを通して、イエス様がまず従順を学ばれたのです。完全な者とされ、私たちにその従順を教えてください。それで従順にする私たちもイエスとともに永遠の救いに入ることになります。

2 課のオリーブ山の道しるべの本文のみことばは、使 1 章 3 節のみことばですが、イエス様が弟子たちと 40 日間神の国のことについて語られたという内容です。オリーブ山で 40 日間神の国のことを語られた。どんな神の国のことなのかについては、具体的にみことばは記録されていません。しかし、神の国を抱いてこの地に來られて生きられたイエス・キリストの生き方を見るなら、イエス様が語られた神の国のことが、どんなことなのかを見ることができます。それは従順です。永遠の神の国を生きようになる私たちに、神様の統治と治められることに従順することを教えられたのです。ですから、神の国のことというのは、あれこれ熱心に何かをやり遂げなさいということではありません。

第3課「マルコの屋上の部屋の道しるべ」

－助け主聖霊の様の導きによって・・・

働き人メッセージで語られたように、各自が神様がまかせたその場で従順を学ぶのです。また、キリストの中で充滿に留まって、私が生きるのではなく、神様が導かれるままに。

それが3課のみことばです。マルコの屋上の部屋の道しるべです。私たちの力で行うことができないので、聖霊を送ると約束され、来られたのです。それゆえ、その聖霊に導かれる、その導きに私たちは従順にして行けば良いのです。それが3課の内容です。

第4課「アンティオキアの道しるべ」

－はくがいにより散らされた人々・・・

4課はアンティオキアの道しるべです。

使徒11章19節が本文ですが、そこには、迫害によって散らされた人々ということばが出てきます。聖霊が導かれるのにもかかわらず、私たちは私たちの思い通り、私の心のままに生きようとし、使徒1章8節で、「地の果てまで、わたしの証人になります」と約束されましたが、「ここが良いから、ここに住みたい」皆がそうなるのです。少しの迫害を超えることを通して散らされるのです。ですから、迫害、患難は、神様のみこころを成し遂げる方法であるのです。もしかして、私が苦難、患難、迫害の中にいるなら、私が何か従順でない状態があるのはでないかと考えてみたら良いでしょう。神様が私たちのその患難を感謝に変えてくださるでしょう。「これが神様のみこころだったのですね」と分かるそのとき、感謝と賛美が私たちの口から出てくるようになるでしょう。

今月、本当に聖霊が導くその道しるべにしたがって皆さんの生活を送るようになりますように。